

The Institute for World Literature 参加記

山田 絵里奈

コペンハーゲン 2017

2017年7月3日～7月26日

於：コペンハーゲン大学

ハーバード大学主催で毎年夏に行われる、The Institute for World Literature(IWL)。香港(2014)、リスボン(2015)、ボストン(2016)と世界各地で開催されてきたが、今年はデンマークのコペンハーゲン大学に、多様なバックグラウンドを持つ135名の参加者たちが集った。

四週間の集中プログラムであるIWLは、主にセミナーとコロキアからなる。

セミナーは、前半と後半の二週ずつに分かれており、十二の内から興味のあるものを二つ選び、参加する。

私は両方とも第一志望に入れ、運がよかった。しかし、希望が叶わなかった参加者たちも、最終的には、普段の関心とは違った観点から文学を考える機会となり、新たな学びがあったと喜んでた。

前半は、ハーバード大学のデイヴィッド・ダムロッシュ教授による「グローバル化とその不満」であった。このセミナーでは、資本主義社会の勃興や「中心」の移行、周縁と半周縁、帝国間の相互作用といったものに着目しながら、グローバル世界文学における問題を辿った。具体的には、カサノヴァ、モレットィ、アプターらによる世界文学とグローバル化についての議論に照らしながら、モリエール、近松門左衛門、ジョイス、樋口一葉、コルタサル、ラシュディらの作品についての考察を行った。

後半はヤコブ大学(ドイツ)のヘンドリック・ビールス教授によるセミナー「世界文学を議論する」であった。ここでは、比較文学とカルチュラル・スタディーズのキータームとしての「世界文学」という概念に焦点を当て、社会経済的・イデオロギー的なグローバル化の進展と「世界文学」の興隆との関係や、その歴史的起源などについて論じた。

コロキアとは、参加者の関心に合わせて10人ほどの小グループに分かれ、参加者によるプレゼンとそれについての議論を行うものである。IWLの参加者は、その大部分が博士課



運河の流れる、現代的なコペンハーゲン大学サウスキャンパス。



WW IIなどで実際に使われた戦闘機の側面には、白いチョークで“Für Paul Celan”の文字が書かれている。

程在籍者であり、教授や研究員なども多くいた。修士で参加した私は、ブカレスト大学教授と同じ回にプレゼンをすることとなり非常に緊張したが、議論を積極的に膨らませようとしてくれる参加者たちに助けられ、多くの気づきを得ることが出来た。

セミナー・コロキアに参加して印象的だったことは、参加者たち一人一人が、自らがどの立場から考えて物を言っているのかに非常に自覚的であり、他者のそれにも

敏感であるということであった。「批判的であれ」とセミナー開始時に教授は言ったが、それぞれの持ち場に足をつけながらも、頭の中は自由に飛び回る彼らに、大きな影響を受けた。

IWLの魅力は、セミナーとコロキアだけではない。ノーベル文学賞選考委員からの選考の裏話や、アーティストによる朗読パフォーマンス、若手研究者がどのように自らの本を出版するかといった実践的なパネル・ディスカッション、参加者の一人による民族楽器演奏など、刺激的なプログラムが数多く用意されていた。

また、開催地であるコペンハーゲンを楽しむ時間ももちろん残されている。ハムレットの舞台になったと言われるクロンボー城への遠足や、コペンハーゲンの街を流れる運河のクルージングは、予習・復習で追いつめられがちだった私のよい息抜きとなり、多くの友達をつくる機会にもなった。自身の研究との関連でいえば、Copenhagen Contemporary という美術館において、ドイツ人アーティスト・キーファーによる、私の研究対象であるツェランのアートを直接見ることが出来たことが嬉しかった。

楽しさと苦しさや気づきが凝縮したこの一か月間は、非常に豊かで鮮烈な思い出となった。クロージング・ディナーにおいて、二月に東京大学にて講演をされた際にお世話になったダムロッシュ教授とデリア・ウングレアヌ教授をはじめ、多くの参加者たちと、来年東京大学での再会を約束し別れた。

最後に、この場をお借りして、このような貴重な機会をくださり、また様々な面においてサポートしてくださった沼野充義先生に心から感謝を申し上げたい。